淘河ノ名アリ、鵜鴟ノ油、聾ヲ治スト云、藥舗ニ賣ルモノアリ、鵜ノ字古ヨリウト訓ズルハ非ナリ、ウハ鷸鷸ナリ、後ニ本條アリ、

〔飼鳥必用中〕カラン鳥一名海老スクイと云

此鳥總羽薄白にて、鳥の形白鳥に似たり、至て大鳥也、咽に袋ありて、海中にて魚を餌にし、雜魚鹽水共呑喰、咽の袋に入、魚計を呑込み、鹽をば後吹出す、背大キク長ク、背の上に玄のぎ有り、袋に水五六升も入程有り、餌飼候節は、雜魚三四升一度に袋に呑込、漸々餌を押候よし、足みじかく水かき有り、尤南海の荒海に住鳥也、

〔桃源遺事五〕一或とき江戸小石川の御屋形のひあはひへ、見馴ぬ鳥落ける所に、翼大にしてせばき所故、飛びあがる事を得ず、西山公〇德川光圀人をして其吭を見せしめ給ふ、吭大にして帷のごとし、人みなその名を玄らず、西山公御覽なされ、是は陶河一名は鵜鴟といふ鳥也と被仰候、

〔閑田耕筆三〕年毎に洛北今宮の御旅所、四條河原の納涼などに出る、奇獸異鳥の類さまざまなり、浪華はまして是を賣買もの多しとぞ、其人語につきて伎をなすこと、見ぬ人に語らば、うけがはじとおもふ計也、〇中略がらん鳥と名付て、鵜鴟（テイコ）を見せしが、頷下に袋有りて、數升の水をのましむるに能收む、たゞし面赤くなり、眼をはたらかして頗苦しむさま也、川澤にてかく水共に呑て魚を取となん、其水は吐出せり、指揮せるもの、言に從ひ、進退せる抔、教ればをしへらるゝもの也と感じぬ、

〔本草和名十五獸禽〕鴈肪、一名鶩肪、鴻、大鴈、小野鵝、一名鴛鵝、已上四名、出陶景注、一名陽鳥、出蘇敬注、一名傳書、一名送故、已上二名、出兼名苑、一名鵌、東人名之、出七卷食經、和名加利、

〔干祿字書去聲〕雁鴈上通下正

〔段注說文解字四上鳥〕鴈、鵝也、鴈與雁各字、鵝與鵝各物、許意、隹部雁爲鴻、雁鳥部、鴈爲鵝、鵝爲野鵝、單呼鵝爲人家所畜之鵝、今字雁鴈不分久矣、禮經單言鴈者皆鴻雁

雁名稱